

# 仏心と葬弁儀 ーその11ー

## 奉仕は社会への恩返し

よく「人間は社会的動物である」と言われます。一人の人間が生きていくうえには、好むと好まざるとにかかわらず、実に数多くの他人との関わり合いの中で生きていかねばなりません。そこで求められる他者への思いやりや感謝の心、同情といった人間愛は、今まで人々が築いてきた社会生活の上で、人生を円滑に全うするために欠くことのできない心情として育まれてきたものだと思います。

特に、家族を失うなど深刻な心の痛みを体験した人は、同じ立場に置かれた他人の苦しみが、まるで自分のことのように感じられ、深い理解を持つことができないのだと思います。

一九六八年に葬儀社・丸和堂を創立した飛田英雄代表は、開業以来、三歳以下の幼児の葬儀料を半額に、生活保護世帯に対しての祭壇や霊柩車の料金を、無料で提供し続けてきました。それというのも、三歳に満たなかった自分の長男を不慮の事故で失った痛切な体験から、同じ悲しみに沈む人々の心を少しでも慰めたいという思いにかられてのことでした。

## 自らの体験による同情の心

また、自らが少年時代、母子家庭による貧しい暮らしを味わっていたことに加え、葬儀社を始めてからも、貧しさゆえに十分な葬儀を出せない家庭の少なくないことを知り、せめて亡くなられた方の最期ぐらいは荘厳に送って差し上げたいと考えてのことでした。

これらの仕事ぶりが噂を呼び、いつしか「奇特的な葬儀社」として名前が知られるようになると同時に、一部の人は、こうした行為が売名や商売の気によるものとの心ない中傷を受けることさえありました。しかし、飛田の場合、葬儀社の開業そのものが「儲けよう」として始めたことではなかったため、開業当初の苦しい時代にあっても、身銭を切るような経営はできなかったものの、自分と同じ癒しがたい心の痛みを抱える人たちの役に立ちたいと思いついての転身であったため、どんなに利益が少なくても乗り越えてこられたのだと飛田は述懐します。「世間に尽くせば、世間も尽くしてくれる」そんな真情が損得を度外視した同情心となつて、今に続く丸和堂の「奇特」と呼ばれるような経営方針につながっているのです。

■ 次回の掲載は七月十八日(土)を予定しております。